

## 都営住宅における孤独死の不安を抱える単身高齢者の特性

目白大学 福島 忍 (4961)

単身高齢者、都営住宅、孤独死

## 1. 研究目的

戦後、高度経済成長期に建てられた大規模集合住宅では居住者の高齢化、単身化が進んでおり、特に公営住宅では社会的弱者の福祉目的としての性格をかなり強めていることから、コミュニティのつながりの希薄さを背景に、孤独死で亡くなるケースも発生している。厚生労働省の「高齢者等が一人で安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議」においても、都市部の集合住宅に居住する高齢者の「孤立現象が大量に発生するリスクが高い」ことが指摘されている。特に、都営住宅では世帯主が65歳以上の世帯が2005年に5割を超えており、高齢で一人暮らしになっても安心して暮らせる環境整備が喫緊の課題として求められている。そこで、本研究では、都営住宅に居住する単身高齢者に焦点をあて、孤独死することへの不安を抱えて生活している人がどのくらいいるのか、またその不安を抱えている人の特性を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

首都圏のA集合住宅のうち、自治会を通して調査協力を得た号棟に居住する単身高齢者を対象とした。調査は協力を得た号棟14棟すべてに行ったが、そのうち1棟は分譲住宅であるため、都営住宅の13棟のみを分析した。調査は無記名自記式質問紙調査であったが、調査の趣旨を理解し同意を表明していただいた人のみに行うとしたため、同意の確認には対象者にとって身近な存在であり、不在の場合事情をより把握できていると考えられた自治会役員に依頼し、共同調査とした。A集合住宅では入居時に自治会に加入することが義務づけられている。しかし、自治会役員が調査のために自宅を訪問することに抵抗感を持つ人もいると考えられたため、対象者には事前に調査の趣旨、自治会役員が意向確認に訪問すること(訪問する自治会役員の氏名と訪問期間の明記)、自治会役員に訪問してほしくない場合は電話やFAX、メール等で調査者に連絡をしてもらえば自治会役員が訪問しないようにすること、個人情報保護に関する事項を明記した通知文を郵送した。そして、指定した期間に訪問拒否の連絡のなかった人に対して、自治会役員が改めて調査依頼文を持参し、書面あるいは口頭により対象者に意向確認を行った。また、この意向確認時に、質問紙への記入や投函を身体上の理由等により一人ではできない、または自信がないとする人には自治会役員、調査者が支援できることを伝え、身体が不自由であってもできるだけ調査に協力してもらえよう配慮した。調査項目は、基本属性のほか、社会的ネットワークの状況として親族との接触頻度、非親族との接触頻度、緊急時に助けを求める人、

緊急通報装置の設置の有無、心配ごとの話し相手、団地内における頼れる人の有無、近所づきあいの状況、お正月を誰かと過ごしたか、受けている支援、生活の満足度、自分が孤独死することを考えたことがあるか、また自身が孤独死することへの不安を感じているかについての項目である。調査期間は、2010年11月22日から2011年1月21日であり、この間で自治会ごとに設定した。

調査協力の同意を得た135人に調査を行った結果、116人から質問紙を回収した（回収率85.9%）。回収した116人のうち、対象外が2人いたため、有効回答者は114人であった。孤独死への不安がある人とない人の2群の差の比較検討では、連続変量についてはt検定を、その他の項目については $\chi^2$ 検定を行った。

### 3. 倫理的配慮

対象者への倫理的配慮として、郵送による調査の実施についての事前通知文、自治会役員が意向確認時に渡した依頼文、郵送した質問紙にその都度、調査は無記名で行うため個人が特定されることはないこと、調査協力は強制ではないので協力をいつ辞退しても本人の不利になることはないこと、結果を目的外には使用しないことを明記した。また、共同調査者である自治会役員には、担当する対象者の個人情報の保護の遵守について、自治会役員会による口頭説明および書面により徹底を図った。

### 4. 研究結果

分析対象者の性別構成は、男性が17人（14.9%）、女性が95人（83.3%）であった。平均年齢は75.39歳（標準偏差＝6.518）であり、後期高齢者の割合は51.8%、最高年齢は91歳であった。「自分が孤独死（誰にも看取られずに亡くなり、死後発見されること）することを考えたことがあるか」聞いたところ、「ある」と答えた人は71.1%であった。「ある」と答えた人に、「自分が孤独死することに不安を感じているか」聞いたところ、「とても感じる」と答えた人は全体の20.2%、「少し感じる」同35.1%、「あまり感じない」同10.5%、「全く感じない」同4.4%であった。

孤独死することに不安を「とても感じる」と答えた人と「少し感じる」と答えた人を「不安あり」群、孤独死することを考えたことが「ない」とした人と孤独死することに不安を「あまり感じない」「全く感じない」と答えた人を「不安なし」群として、これらの2群について各項目ごとに検討を行った結果、「不安あり」群の割合が有意に高かった項目は、「主観的健康状態」における「健康不良」群、現在「子どもがいない」と答えた人、親族との接触頻度が「月に1回程度以下」であった人、緊急時に助けを求める人において「子どもやその配偶者」と回答しなかった人、心配ごとの話し相手で「近所の人」と答えなかった人、団地内に頼れる人が「いない」と答えた人、お正月3が日を「ずっと一人で過ごした」と答えた人、その3が日に会った人が「兄弟姉妹」と答えた人、「生活の満足度」が「まあまあ満足している」以下であった人、「安否確認」「身体の介助や介護」「家事の手伝い」「食料品やお弁当などの宅配」の支援における「必要あり」群であった。